愛知県豊田市

新銘柄「とよたひまわりポーク」が誕生し流通スタート

地産地消で愛される豚肉を目指す

愛知県の北部に位置する豊田市は、トヨタ自動車が本社を置く街として有名であるが、古くから農業が盛んな土地でもある。本年９月より新たな銘柄豚「とよたひまわりポーク」が誕生し、市内スーパーなどで販売がスタートした。

この銘柄豚は豊田市の養豚生産農家であるトヨタファーム、㈲堀田畜産、㈱内山の３農場が生産しているもので、地元で長く愛される豚肉を目指している。

豊田市の花にちなんで命名 ３農場協力し出荷

ブランドの特徴は、豊田市内で健康に育てられた豚であること。また、豊田市の花であるひまわりにちなんで、ひまわりの種粉末を配合飼料に添加している。トヨタファームは一貫経営、堀田畜産、内山は肥育農家として、月当たり計300頭前後を豊田食肉中央卸売市場に出荷している。

豊田市内すべての精肉店・飲食店がより自由に取り扱いできる、市民のための地産地消銘柄豚というコンセプトを掲げており、今後は学校給食や社員食堂で提供できるような体制づくりに取り組んでいくという。

スーパーなどで販売を開始したのは今年９月と、まさにスタートをきったばかり。現在、10月31日まで銘柄豚のロゴマークを豊田市内の小中学校、高校に広く公募しており、採用者には豚肉を進呈する予定だ。また、今後はさらに銘柄豚の特徴を押し出していくため、豊田市内の小学校で育てられたひまわりや、豊田スタジアム周辺のひまわり畑に協力を要請し、種を飼料に添加するための耕畜連携を計画している。

豚熱の被害乗り越え再開

2018年９月、国内で26年ぶりの発生となったCSF（豚熱）は、初発となった岐阜県をはじめ、東海地方を中心に甚大な被害をもたらした。トヨタファームは2019年２月、愛知県内の農場で初めてCSFの感染が確認され、約１年間の操業停止に追い込まれた。

しかしその後、愛知県の後押しもあり、再開に向けて農場内外の消毒作業や再発防止策に取り組み、2019年７月に清浄性検査をクリアし愛知県畜産センターから母豚８頭を導入し事業を再開した。

このような経緯を経る中で、フィードワン・フーズ㈱を通じて豊田市生活協同組合が運営するスーパーで豊田市産の豚肉を扱いたいという依頼があり、今回の銘柄誕生につながったという。

トヨタファーム代表の鋤柄雄一氏は「私自身はすでに「三州豚」というブランド名で銘柄豚の生産に取り組んでいました。依頼を受け、より地元に根差した銘柄豚を、地元の生産農家とともに取り組みたいと考え、堀田畜産、内山にも参

とよたひまわりポークのPRとして、スーパーの売り場に設置されているイラスト。今後は内山の農場写真や募集中のロゴマークを加えていく予定

事業再開したトヨタファーム豊田農場

トヨタファームが生産する三州豚

加してもらいました」と経緯を説明する。

トヨタファームは豊田市の農場のほか、渥美半島にも肥育農場を構えていたが、豚熱の影響で現在は休止状態。2021年からの再稼働を目標としており、今後は豊田農場から出荷する肉豚をとよたひまわりポーク、田原農場での生産は三州豚として出荷していく方針だ。

同様に、堀田畜産、内山も豚熱の被害を受けており、今回の銘柄豚立ち上げは豚熱からの再起の一歩となった。

畜産を親しみの持てる事業にするために

愛知県では2019年10月下旬から豚熱のワクチン接種が実施された。その後、2020年３月の沖縄県での発生を最後に、日本国内での新規発生はみられていない。しかしトヨタファームが事業を再開したのはワクチン接種前であり、万が一再発生した場合のことを考えると大きな不安もあったという。それでも事業を再開することで、地域に養豚業、畜産という産業をより知ってもらいたいという思いを持ち続けている。

とよたひまわりポークが動き出す以前の今年６月には、豊田市内のさまざまな農畜産業に携わる経営者で構成される「夢農人とよた」と、三州豚を取り扱う愛知県豊橋市の鳥市精肉店が協力し、豊田スタジアム敷地内でドライブスルートヨタマルシェを決行するなど、地域への積極的なアピールを絶やさない。

鋤柄氏は「畜産は臭いの問題など、迷惑産業だと昔から思っている部分はあります。しかし、養豚は食生活にとって必要なもの。とよたひまわりポークは始まったばかりの銘柄ですが、関わっている人たち全員で行動し、この銘柄豚の存在を通じて親しみを持ってもらうことで、業界への風当たりも変わってくれればと思います」としている。